

「エリコ陥落」

小森文雄

ヨシュア 6：1～7

エリコは、イスラエルの子らの前に、城門を堅く閉ざして、出入りする者はいなかった。主はヨシュアに告げられた。「見よ。わたしはエリコとその王、勇士たちをあなたの手に渡した。あなたがた戦士はみな、町の周りを回れ。町の周囲を一周せよ。六日間そのようにせよ。七人の祭司たちは七つの雄羊の角笛を手にして、箱の前を進め。七日目には、あなたがたは七回、町の周りを回り、祭司たちは角笛を吹き鳴らせ。祭司たちが雄羊の角笛を長く吹き鳴らし、あなたがたがその角笛の音を聞いたら、民はみな大声でときの声をあげよ。そうすれば町の城壁はくずれ落ちる。民はそれぞれ、まっすぐに攻め上れ。」

ヌンの子ヨシュアは祭司たちに呼びかけた。「契約の箱を担ぎなさい。七人の祭司は七つの雄羊の角笛を持ち、主の箱の前を進みなさい。」そして民に言った。「進んで行き、町の周りを回りなさい。武装した者たちは主の箱の前を進みなさい。」

ヨシュアと共におられることを証しされる神

神は、「モーセとともにいたように、あなたとともにいる。」(1章5節)と約束されました。神は、そのことを民の前で証しされます。イスラエルの民が増水したヨルダン川を渡るとき、祭司たちが担ぐ契約の箱が川にとどまっている間中、流れは上流でせき止められ民は乾いた地を渡ることが出来たのです(3章14～17節)。民は命じられた通り、ヨルダン川の真ん中から12の石をとり、宿営にそれを積み上げ神のみわざの記念としました(4章19～24)。「その日、主は全イスラエルの目の前で、ヨシュアを大いなる者とされた。それで彼らは、モーセを恐れたように、ヨシュアをのの一生の間、恐れた。」4章14節

エリコの人々はイスラエルの噂を聞いて恐れていた

エリコは、大きな城壁を持つ頑丈な町でした。二人の偵察隊をかくまった遊女ラハブの家は

その城壁に立て込まれていて、彼女はその城壁の中に住んでいます(2章15節)。赤いひもを「しるし」として窓に結びつけるように(2章18節)偵察隊と話していることからすると、他にも多くの家が同様の構造だったと思われます。「この地の住民がみな、あなたがたのために震えおののいている」(2章9節)とラハブから聞きます。ラハブは後に、ダビデ王そしてイエス・キリストの家系に名を残しています。

エリコ攻略の不思議な方法

そのような強固なエリコを、神は不思議な方法で攻め滅ぼすように命じられます。六日間契約の箱とともに無言で城壁の周りを一周し、七日目には七回回って角笛の合図とともに時の声を上げることでした。武力による攻撃ではなく、ただ城壁の周りを回るという不思議な方法でした。見たことも聞いたこともない方法です。かつてイスラエルの民が、荒野を放浪していたとき「燃える蛇」(噛まれると焼け付くような痛みと激しい毒を持つ蛇)により、多くの民が倒れた(民数記21章6節)。神は「燃える蛇を作り、それを旗ざおの上に付けよ。かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きる。」と語られました。青銅の蛇に力があつたのではなく、神の約束を信じて仰ぎ見た者だけが、死を免れることができたのです。これも不思議な方法です。

主イエスは、「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです。」(ヨハネ3章14～15)とニコデモに語られました。

イスラエルの民は、難攻不落なエリコの町を不思議な方法で攻めるように命じられたとおりに従いました。あり得ない方法であつたとしても「神のことばに」従うように求められたのです。(「聖絶」に関しては、別の機会に学ぶこととします。)

「弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。『それでは、だれが救われることができるでしょう。』 イエスは、彼らをじっと見て言われた。『それは人にはできないことです。しかし、神は違います。神にはどんなことでもできるのです。』(マルコ10章26～27節)」

神は、あり得ない不思議な方法をもって私たちを、罪の滅びから贖い出して下さりました。「それを仰ぎ見れば生きる。」のです。